

## 資料紹介

### 鹿児島県国語教育史資料―その二―

#### 「磯長武雄研究ノート」資料補遺

#### 一、磯長武雄著作文献目録

- ・「甲、昭和四年度綴方教育施設」
    - 「綴方教育」昭和五年四月號
  - ・「潮音短歌の都會相」
    - 「潮音」第十六卷昭和五年十月號
  - ・「巻頭言 兒童詩教育の現状を觀る」
    - 「童詩教育」創刊號 昭和七年四月
  - ・「自由放送」田住牛夫（注・磯長のペンネーム）
    - 「童詩教育」創刊號 昭和七年四月
  - ・「兒童への詩話」田住牛夫
    - 「童詩教育」昭和八年十一月
  - ・「生活詩を觀る」
    - 「童詩教育」七月號第一卷第四號
  - ・「山下君の實地授業を觀る」田住牛夫
    - 「童詩教育」第二卷第三號昭和八年十二月
  - ・「街の子供の詩」
    - 「綴り方俱樂部」昭和十年二月號
  - ・「兒童詩の指導精神」
- 
- 「工程」創刊號 昭和十年四月
  - 「綴方地區」
    - 「工程」昭和十年十一月號
  - 「年刊日本兒童詩集」への期待」
    - 「工程」昭和十年十一月號
  - 「覗き眼鏡的に― 兒童詩の現状批判」
    - 「工程」昭和十一年三月號
  - 「轉換期の兒童詩― 吉田瑞穂氏著『兒童詩發展段階』を讀む」
    - 「工程」昭和十一年五月號
  - 「綴方理論の大衆化」
    - 「工程」昭和十一年八月號
  - 「綴方實踐の大衆化運動とその方策」
    - 「工程」昭和十一年九月號
  - 「本年度版の諸特質」
    - 「工程」昭和十一年十二月號
  - 「昭和十一年綴方教育界の諸問題」
    - 「工程」第三卷第一號

新名主 健 一

（一九八九年十月十五日 受理）

二、「潮音」誌上における磯長の和歌

大正十年

「潮音」第七卷一月号

友の心

けふもまた雨の降れば海よりきて大川の水に千鳥啼くなり  
川のべを啼きつとべる濱千鳥声あはれなり時雨るなかに  
たまきはる生命をかけて恋ひたるなり報ひはなしと云ふかわが友  
しみじみと田井に麦蒔く人らあり吾れこの村に絵を描かんとす

「潮音」第七卷三月号

葬火

墓山に人を葬むる鉦ならんかすかにとほくに鳴り来  
葬火は消ぬがに立ちて消えけり涙をながし念佛申す  
しごとやめて熱き茶を飲む夕べなり障子濡らして時雨は通る  
怠りを悔ゆる心のあらはなり障子を濡らす雨の音かも

「潮音」第七卷 四月号

月あかり

遠くゆく人を送ると海に来て寂しき心砂を盛るなり  
冬晴れや海を距てて掛宿の人らの家居手にとるごとし  
海のいる曇り来りていちちやく鳥山裾は雨にけぶれる  
下り坂展けて村は一望<sup>ひとゆ</sup>なり空に聳ゆる銀杏の枯木  
暮れのこる大川の水の寂しき色潮風まとも吹きながれゆく  
人のかげ月夜あかりにおほおほし親み心よせて行くなり

「潮音」七卷 五月号

生長

この朝の時雨をよけて家蔭に訣ればなしをする二人かも  
窓のべの芭蕉の蔭に立ちてゐてつましかりし人の面影

おのづから寝覺められしきこの朝鴉のこゑは空にみちたり

よべの雨霽れし朝の木の雫睦月この村梅さきにけり

大川の水に来て浮く鷗鳥雨のあしたのしづごころかも

あしびきの山峡間に立つ靄を我窓にしてかなしき朝かな

山の雪告ぐる母なりこの朝の味噌汁煮ると畑に出でて

おのづから湧くうれへなればはたら雪ふり積む朝の山に向ひて

「潮音」第七卷 六月号

村居

さらさらと松の梢の撓る音寂しき人を思ひつづくる

住み慣れて愈よ親しき前見山夕べの色に暮れてゆくなり

山かげの奥津城所静かなり梅のさかりの里見下して

海に来て身はすくはれし思ひなり空いちめんに映ゆる夕雲

山越えて遙々とし乗馬兵ゆうべ賑やかに村に入りたり

「潮音」第七卷 七月号

開聞山

野に出でて働く人は寂しからん茶の木の蔭に湯呑を置きて

遠く来て寂しと思ふこの丘の草に坐りて海を見てゐる

雨やがて晴るるさまなり霧の間に姿を見する開聞の山

日曜に城跡に来て書きしてふ人のたよりはなつかしきもの

わらはべを教へ教へて山の村に人の嘆のあらたなりけり

「潮音」第七卷 八月号

空晴れて

かへり来て苺畑の草除るをこのごろのわが樂しみとせり

繭の値を讀みあぐる聲遠く洩れてあかあかと灯の親しき夕べ

湯あがりの眠たきほどの静けさに遠田の蛙鳴き出でにけり

時の間を居て歸りゆく春雄なり歌の話がこの日の別れ

よろこびを乗せつつ走る汽車にして眠りは深き汝をぞ思ふ  
ものの本飽かず讀みつつ朝に夕に安らかなりと告げてやらまし

梅雨明けて日の空に鳴く鶯の聲村の田植もおほかた終へぬ

「潮音」第七卷 十月号

海邊

星くづの夜空にくろき開聞嶽海を隔てて静かなるかな

おのづから夕べとなれば海に來て心のうれへをうたひいづるなり

大浪に乗りつつぞ行く友の舟を濱邊に立ちて見送りてゐる

朝たけてやうやく暑しこかしこ木槿の花は日に咲きてゐる

「潮音」第七卷 十一月号

村家

日に照るや青く澄みつつ山巖のあらはにかなし櫻島山

道もせにかしぎ垂れたる笹竹の峽間の村を越えて行きけり

雨にぬれやうやくつきし瀬々串の村家はすべて兎を飼へり

降る雨にこもりて人と静かなり霧ややはれて窓近き山

海近きこの棚田の稲の葉は潮にいたみて枯色なせり

寂しさをとめて來にけり崎鼻に寄せきておだむ磯波の音

濱近くこの入江にふね泊めて晴々しかも町の屋竝は

「潮音」第七卷 十二月号

わく兒

朝の雨にふりこめられて隣りの兒かはゆきかもよ本讀む聲の

いちはやく隣りに起る朝のうた牧夫がうたふ鳩ポツポ歌

十五夜の月に網引く子供らのわかさは吾にかへり來ぬなり

山蔭の草生がなかに咲き出でて災だちたる曼珠沙華の花

雲のゆきかはればかはる山の色風落ちゆきて日は暮るるなり

とめくれればこの山蔭の粟畑秋風の中に寒き色なり

まちまけてきのふも今日も暮したり昨夜の夢は「潮音」のゆめ  
大正十一年

「潮音」第八卷 一月号

茶の花

土間に來て馳なくなり母と我と甘酒を爐にわかつて居れば

刈りはてて寂しくなりし門の田に時雨いちめんふりて來れり

あさり來て門田に遠く遊ぶ鶏尻毛は風に吹かれつつある

朝蘭けて日はまともなり落花生ここにかしこに乾してある村

山の宿に兄と寝てするものがたり鶉たまたま啼く寒夜なり

「潮音」第八卷 二月、三月、四月号なし

「潮音」第八卷 五月号

○

啼きうつる山の小鳥ら我か窓につく群が來て朝蘭けにけり

日ぐれ來て風色寒き練兵場入り日に向ひ行く人のあり

木枯の中にたちつつ思ふこと明日と云ふ日もたのまれぬなり

あの山は櫻島なり遠く來てこのよろこびにふれにけるかも（行軍）

草を刈り疲るれば來て木の蔭に晝寝するなり「セザンヌ」の牧夫

花の野の霞に深くとけいりて姿寂しく啼く雲雀なり

ゆく春を惜むころぞあげ雲雀羽根ふるはせて啼くにあらずや

「潮音」第八卷 六月号

○

おのづから歌ひいでたる歌の聲春の野づらにひびきわたれり

大根の花にかくれてゆきにけり響きたのしき子供等の聲

薔薇の花照る日に咲きてゆたかなる春の恵みにわれ逢ひにけり

むらぎもの心一途にせきあぐるおのが願ひに泣かされにけり

「潮音」第八巻 七月、八月、九月、十月なし

「潮音」第八巻 十一月号

萱草の花とあそべばたあいなし口笛を吹くわれの癖かも  
コスモスの垣をめぐりて咲く家に遊ぶ蜻蛉がうらやましきぞ  
父母よ秋は來にけり朝な朝な菜の味噌汁をすすりるまさん  
大正十二年

「潮音」第九巻 一月、二月、三月、四月、五月号なし

「潮音」第九巻 六月号

歸り栖みて(特選)

人を焼く野邊の送りの入りつ陽にこらへかねたる涙を落とす  
今朝ことに聲賑やかにゆく子らに幼心をよせてをりたり  
硝子戸の向ふに見ゆる雑木山騷立ちにつつ雪荒れくるも  
夜まはりが叩く拍子木の音きこゆ仕事をやめて寐まる時なり  
門の邊に日永く咲きし寒薔薇の花ちりそむるあたたかさなり  
菜の花にうたたねもせん日和なり筵をしきてあそべる子ども  
ふるさとの山見えそめぬ父母の姿とおもふ櫻島はも  
坂道の見えきたりたるその人を父かと思れば父なりにけり

「潮音」第九巻 七月号

葡萄棚(特選)

山の手の林におこる子どもらの戦さあそびに春は闌けゆく  
花咲きて家居明るくなりけり日傘ちらほらゆく垣根道  
葡萄棚洩れくる朝日あかるくて巣箱を出づる雌鶏のこゑ  
家並の上に晴れたる青空にカラロとなりぬ五月熾は  
屋根の上に落葉たまれりあぢさゐの花一株の山かげの家  
窓あくれば外は明るき五月晴日傘かたむけ人出でてくる

ペリカンのこゑするどくも響きたり池水にすむ青空のいろ  
子どもとは思へぬわざをふるまひて怖づるいろなき薩摩の子らは(少年野球)

「潮音」第九巻 八月号

日和風(特選)

子どもらと野に出て遊ぶ蓬摘み幼きものとなりけるかな  
寐ころびて聞けば一入あはれなり春も老けゆくどうづきの唄  
肥つみてのぼる舟脚おもおもと葦の若葉をおしふせてゆく  
萱叢を吹きなびけゆく風白し汐鳴り近く海へ出る道  
戸袋の壁にすがれる青蛙足ふんばりてをさなげなるよ  
陽はぼうと霞みて沖の汐曇り海のあいろの寂しまるるも  
乳母車ひきすてて人は居らぬなり樗の花の蔭ふかき庭  
雨やんで色よき松のながめかな網うつ人のあらはれて見ゆ

「潮音」第九巻 九月号

日毎の勤(特選)

五月雨のふりけふりたる港街傘かさなりて混み合ふ人ら  
植ゑつけの茄子にこやしをやるひまも旅ゆく友を思ひてゐたり  
無花果の葉にそぼそぼとふる小雨蟹一つ部屋にのぼり来にけり  
ころころと蛙のこゑのたのもしき柳田の堰は水あふれたり  
あげ汐やなにかこころのはづみ来る葦邊の水を泳ぐ子どもら  
鱗雲一流れしてわが窓に久しぶりなる蒼空のいろ  
松蟬のこゑのいきるる豆畑土瓶の水をのみてはたらく  
合歡の葉の眠る夕べとなりけり風呂を呼びたる隣り家の聲

「潮音」第九巻 十月号

白き道(特選)

機を織る村にきにけり日盛りの垣根にからむ凌霄花  
ちろちろと樋竹を落つる水の音池に菖蒲の花咲きにけり

蓑笠の一竿にならびうごくなり河邊の葦のよしきりの聲（田植）

この庭の蘇鐵の新芽ほだちけり光寂びたる弥陀の本堂  
堂裏の墓地へつづける細道にかすかに青む苔のいろかな  
くれのこる木権の花の夕明り蜻蛉をさなくいまだ遊べる  
草土手の木権の花にあそぶ馬尻尾振りふる寂しさをして  
蟬袋に蟬を鳴かせて子はゆけり眞晝ざかりの公園の道  
けふの日も暮れにけるかも閑古鳥青杉山にふかく隠れて  
玉蟲の翅の光りて飛びにけり夏日にむせて白き道ゆく

○ 「潮音」第九卷 十一月号

撫子の花もしほるる暑さかな荷馬は埃の中生きにけり  
七夕の笹の露づく夜はふけて灯を消しにけりわが山の家  
さやさやと揺るる月夜の竹林人の情は身にあまりたり  
その兄は乳母車押して行きにけり夕べ涼しき草土手の道  
二つ三つ白帆ちらしてたゆらなる薩摩の海の秋の日の照り  
軒雫落ちくるほどの夜の雨にこころほどけてゐたまひにけり  
草の家の軒に灯して魂迎ふしづかなる夜はわれにきにけり（父）

○ 「潮音」第九卷 十二月号

休刊（震災後の臨時処置として）

大正十三年

○ 「潮音」第十卷 一月号

ふらふらと月夜を来れば竹藪の奥手にありて餅を搗く家  
乾瓢を干しならべたる寺庭に匂ひをひろぐ蘭の花かも  
幾坂を越えては来つれしらじらと立かたむけて咲く蕎麦の花  
子どもらとお宮の庭にひろひたる椎の実は手にあまるほどなり

行燈の灯かげ佗しき集ひなり水鶏笛吹いてゐたまひにけり（芭蕉翁）  
菊の花咲きつづく日となりにけり障子明るき山下の家  
棕栢の葉にむすぶ夜露の身にしみて冬めく星の空の冴えかも  
この庭の樋竹を落つる苔水の音さるさると寒菊の花

○ 「潮音」第十卷 二月号

朝たけて時雨模様となりにけり沖にひろがる潮けぶりかも  
のっそりと七面鳥はあゆみ出てしぐれの雨の晴るる朝かも  
古竹の樋もこほれる朝寒に冬菜の青み眼にしたしまし  
ばら色の夜明けの空に浮び出て眉うつくしくとりよろふ山  
うららかな日曜日なり千紬を縁にひろげて日向ぼこする

○ 「潮音」第十卷 三月号

冬晴や薩摩の海の青潮に羽根光らせてひるかへる鳥  
縁先の八つ手の花に虹むれて羽織をぬぎし正月日和  
朝早くお寺詣りをする人に鳥も来てなく極楽日和  
刈小田の根株芽をふく日和かも春立つ早きみんなみの村  
岩の上に涙をおとす小鳥かやたよりなげにも暮るる冬海  
足袋羽織ぬぎても遊べ寒ばらの花のくづるる小春の日和  
わがものとなさざらめやもきさらぎの星にも云ふ棕櫚の葉のこゑ

○ 「潮音」第十卷 四月号

竹藪に霰がふれば冬ごもりいとどわびしく何もせぬなり  
蓮池におたまじゃくしが尾をふりて朝から寺の鐘きこゆなり  
やするまで風に痩せたる穂芒の一重心よたのまるるなり  
丘の上の菜の花日和とんで来て蟬も蝶々も顔あはせたり

寺藪の奥より雉子の声ひびき春雨らしくなりにけるかも  
その歌の一つ一つのいたまじき顔がならべり信濃の人の  
その歌に似てたのもしや白粉も紅もにははぬ木綿着の人(梶浦氏)

○ 「潮音」第十卷 五月号

筍の竹の林のしづけさにこころ憂き日をひとり入りきぬ  
海棠の蕾ふくらむ宿の庭土あたたかに鶉の啼く  
毛糸あむ子をあそばせて軒下に干し大根の乾く昼なり  
おぼろ夜の花の明りや夢ならぬたのしきことのわれにあるらし  
眼をあきて見る硝子戸の朝明り汽笛をならすふる里の海  
フリジアの花鉢一つ床の間に匂ひこぼるる家に来にけり

○ 「潮音」第十卷 六月号

菜の花の峠を越えてゆきにけりいくたび空に雲雀あがりし  
フリジアの花に五輪の小床かなかなしみふかく籠る幾日  
青麦の走り穂見ゆる田圃道ふる里の春に帰り来にけり  
鶉の鳥の雨にぬれたる姿さへ旅ゆくわれの憂へととなりて  
誰れか吹く草笛ならむ走り穂の田圃見てゆく幌馬車のうへに  
苔生えて古き屋廂佗びてすむ片山かげの橙々の家  
藁はこぶ巢どり雀のせわしさに日の入り惜しむ春のくれがた

○ 「潮音」第十卷 七月号

とよもして蛙が鳴けばわが憂へ胸せきあげて涙となるも  
鯉織とびとびに立つふる里の若葉の春も久しぶりなる(人に)  
鼻がほうほと啼けばちち母のこひしくあらし遊び呆けても  
相ともに脇をひらきて一途なりながす涙に悔はなきかも

なにかそのうれひありげの姿なり雨に濡れたる藤なみの花  
一しほの寂しさまさる思ひかも闇をつんざきて啼く杜鵑

○ 「潮音」第十卷 八月号

星(特選)

告げたさの思ひは胸にあまるぞよ星にかけきて幾日ならむ  
働けばかなしきことも忘るなり闇せまりきし教室の窓  
鳳仙花かすかに咲きていつとなく散るはかなさに似たる命か  
蓑を着て学校にくる子供あり五月雨ふりとなりけるかな  
鯉織風にはためきて晝霞空のはてまでひるがりにけり  
柿の葉に軒端明るきわが住居鳥の巢立ちをよろこびにけり  
梅雨晴れの飛行日和となりけり開聞こゆるプロペラの音

○ 「潮音」第十卷 九月号

蟬啼く頃(特選)

わが胸にしみてながるる蟬の声しづかに山も暮れ初めにけり  
梅雨すぎて夏いやふかむ七月の佐夢のみさきの白雲の凝り  
かへり来て庭に水まく気やすさにそよぎも出づる青竹の籟  
ひらりひらり螢ともして舞ひゆきぬ埃おちつく草藪の道  
夏といへどまだ鶯の声惜しむ村にもいつか住みなれにけり  
くちづけて蓋をはなれぬ蝶々の夢美しき眠りを思ふ  
忙しさは夕べとなりてひとしきり膳の支度をととのふるらし  
夢さらに人の誠をうたがはず祈りつづけて夏となりけり

○ 「潮音」第十卷 十月号

蟲干(特選)

向日葵の花かたむきて風車しきりにまはる屋根の見はらし(測侯所)  
旅ごころひとりはうしや溝川の泥の匂ひのみなざらふ道  
沼尻のどろにかくれて魚小さし蓮にこぼるる夕立の雨

四五本の朱欒を庭の山住居しづかなる世を羨みにけり（伊勢氏）  
暑き日や西瓜まくらにつくづくと晝の寝どきもわずれたるかな  
あけ汐は中洲の葦をひたしつたまたまはねて飛ぶ魚のあり  
夕立に蛇の目すばめて廣重の繪をひろげたる橋景色かな  
ともしたる盆どうらうのはればれと魂もきてるんわが家の軒

「潮音」第十卷 十一月号

彼岸曇（特選）

鶏遠く大豆畠に出てあそぶ秋の小村の旅をゆくなり  
暮れはてて雨の泊りとなりけり襖の色の煤けたる宿  
ひぐらしのせかせか鳴いて日の暮れの山の麓に宿とりにけり  
沼陰に片よりて咲く水草の花しづかなり君がふるさと  
あの山の彼岸曇りに霞む日は歌よみて人をしのぶなりけり  
面白く蝗は草に遊びつつ野稗のみのり色に出にけり  
浮び出て緋鯉もせなを見せにけり虹美しき噴水の池  
障子あけて人の寢息のすやすやと夏蠶の繭をつくりたる家

「潮音」第十卷 十二月号

丝瓜（特選）

青北の荒模様ぞと戸を閉して晝も寝てゐる磯の一つ家（青北は日和の事）  
空はまだ紫苑の花に月照りて眉きよらかに眠りたる山  
厨邊になくこぼろぎのほそほと米磨ぐ母と思ひさびしむ  
いそがるる冬の仕度の夜なべして山の鼻を寂しがるかな  
まんまるく月はのぼりぬよろこびの夕顔棚にあまる宵かな  
秋ふかく隣りの人もすみにけりまがきにからむ丝瓜の蔓  
雁の聲空ほんのりと茜してなごろの波の遠くなりたる  
竹島も霞む峠の見はらしに鷹を見つけてたのもしかりき

大正十四年

「潮音」第十一卷 一月号

唐芋（特選）

小山田の鳴子の音にきこえきて晝の茶に食ふ唐芋の味  
糸わくの前に小さく坐りたる袖なし姿母寂びにけり  
晝一日障子をしめてこもるらし藪かげ白くひらく茶の花（人に）  
雨冷えぬ障子をしめてこもる日は古き手紙を出して讀みをり  
糲干して縁の日向のあたたかに恵まれてゐる山住居なり  
いつとなく夜は更けぬらむけふもこの日記のはしに歌書きつけつ  
栗の實のえみてこぼるる山日和鳥わなかけてわれのたのしむ  
岩にしむ磯の匂ひのつくづくと船蟲とゐてあそぶ晝なり

「潮音」第十一卷 二月号

湯豆腐（特選）

とむらひの鐘がなるなり目を閉ぢて無縁の人にゆくこゝろかな  
火にかけて煮えこぼれくる味噌汁を吹き吹きすゝる曇日の宵  
新妻と人目にたゝぬ佗住のしづかなるかな歌の掛軸（久木田兄）  
軒の日に色づき來にしつるし柿しづかに歌をよむべかりけり  
うちむかふ冬の荒海日のすさまじく潮かぶりゐる磯の網小屋  
帰りきて旅の話もそこそこに葱の畦間にかくる水肥  
竹の葉に宵の時雨のさらさらと膳にのぼせん湯豆腐もがな  
草しきて密柑の皮をむきてをり空を小さくゆく渡り鳥

「潮音」第十一卷 三月号

とろゝ汁（特選）

新割りて日暮れとなりしくりやぬちとろゝする音きこえきたりぬ  
川尻の水雛寒き日の暮れに聲みだれたる濱千鳥かも  
霜晴れや萬雨の實の日だまりにかつが霜の解けそめてをり

冬の夜はけながくあらん早起きて烟管煙草をのます父かも

ふる里に帰りてもわれあはれなり粥を煮てやる母の枕邊

ふる里に帰りぬるなり霜冷えの枕邊にきく汽船の山彦

竹山にうつすらはへる夕靄のしづかさをしもわがものとしつ

縁端の手洗に張る薄ごほり朝はやとくる梅日和なり

「潮音」第十一巻 四月号

温床 (特選)

木蓮の芽立を伯母は云ひにけり一雨ごとに寒ゆるびくる

波千里佐多の岬をのり越えて春のうしほはながれきにけり

鴨どりのくひこぼしたる櫛の實の霜にかじけしけさの岨路

水錆田におたまじゃくしの生れこしと田べりに出でて遊ぶ子どもら

川べりのおどろが中に萌え出でし根芹の水の浅き春かな

木蓮の太芽をぬらす春雨の朝あたゝかくなりけるかも

雷の初鳴りひびく軒先にさくらの花の舞ひひるがへる

まごころの姉が諫めを一すぢの歌に生くべき君にあれやも (丸野兄に)

麥を吹く風は春なり舞ひあがる雲雀のさそふ旅ごころかも

「潮音」第十一巻 五月号

菜畠 (特選)

貝よせの夕べの嵐をさまりて田にけろけろと蛙鳴く日や

よろこべば子らをつれ出て野には来つ松に風情のあまる菜畠

つばくらめ岬の春に歸り来て空に狂ひとぶ花ぐもりなり

春の日に田川の水のぬるみつつお玉じゃくしは泳ぎそめたり

家の戸をあけひろげたり人出でて茶釜を洗ふ井戸の朝晴

桑の葉に落ちし涙の思ひ出もいまはた遠くわすれはてけむ (人に)

草しきてかたる言葉もしんみりと峠の雲雀雲に入るなり

籠の鳥も春をうたふか放課後を一人たのしむ教室の窓

「潮音」第十一巻 六月号

茶漬 (特選)

蠅もきて膝に遊べり障子戸の曇りはれゆく雨上りかな

唐湊山のジャンボの味も友だちも久しぶりなる歌會に来つ

鳥のきて水やのみけん手洗のふちにぼつちり白き鳥糞

うららかにかすむ菜畑の花明り昨日も今日も遊び暮しつ

ふる里は楠の新芽のつやつやと母すこやかにけりけるかも

この春を遊び暮して悔はなし卵をうみて啼けるにはとり

巢の中に卵は二ついきいきと温みもちて春のものなり

降るとしもなく春雨の糸ながら木々にふり入る音の寂かさ

かもめ鳥海に泛びて春の日は暮るるにおそき花曇りなり

「潮音」第十一巻 八月号

樽の花 (特選)

十年の月日さながら目に見ゆれ白髪まじりて居給ひにけり (舊師を訪ふ)

十年の思ひよ窓に雲雀子の囀りて師と共にあるなり

野良は今晝飯時となりにけり木蔭に人ら集まりてゐつ

雀子の巢立つ朝なり柿若葉茂り明るく茶をつくる家

子を連れて雀きあそぶ庭の上樽の花はちりこぼれたり

この溪の岩間にひそみ鳴くものに夏は河鹿の聲あはれなり

苗代を五位かち渉る夕ばれや山には山のたのしさのあり

みづみづし柘榴の花にしばらくの明りを見る梅雨の夕ばれ

「潮音」第十一巻 九月号

○

只一人月を眺むる寂しさもなつかしまるる歌ごころかな

蟲の音のすだく夜ごろや月冴えて穴に蛙もひそまりぬらし

葉煙草の匂ひいきれて晝蟬の聲つくづくと夏となりけり

街道は玉蟲のとぶ晝あらし水屋臺の車ゆくなり

じりじりと眞日照りつくる庭木立思ひにあまる熊蟬くまじよなく聲

この夏のわづらひ事も茅蜩の夕べとなれば忘れはてつつ

「潮音」第十一卷 十一月号

白き繭(特選)

にはとりは鶏舎に上りて蚊柱の立ちくづれるる葡萄棚かな

雁來紅垣越しのぞく家々のかひこは白き繭をつくれり

種ものを柱に懸けてこの秋の蟲のかせぎをへにけるかも

朝なきな軒場ぬらしてゆく雨の秋に向ひて澄むころかも

雁來紅色に出でつつ故郷は繭かきいそぐ秋にあるらし

葦の洲の夕陽だまりに一心の眼を澄ましたる田打蟹かも

水色の荅をほどく朝顔のあかつき夢のしづかなるかな

伯母が挽く粉石臼のころごとと二百十日は暮れてしまへる

「潮音」第十一卷 十二月号 十二月一日発行

鼯の顔

おきあまる露ほろほろと實となりし零餘子をひろふ朝ごころかな

藪かげに顔を見せたる鼯の子に吹きすぎて風の寒き朝かな

秋まつり甘酒つくる日も近しきのふも今日も稻刈日和

秋風に藪の鼯も寒からんこよひ羽織を出してかさねる

にはかなる今朝の寒さにちる銀杏袖なしすがたあはれなる子や

ふる里に老いたる親のわび住まひ零餘子飯を焚きていませる(歸省)

鬼薊の花しどろなる道しるべ岬街道の秋をゆくなり

旅に住みてものあはれも知りにけり行季に蚊帳をしまふ朝かな

大正十五年

「潮音」第十二卷 一月号

○(特選)

野はいつか案山子もとれて冬枯れの見るとではなき風の色なる

人戀しき秋の夜ながの佗びしさに刈萱集を枕して寝る

暗き世のさだめと思ふ歸りきし人に一畝の田もなかりけり

おとろへの眼に秋風のふる里は辛くやあらんかはらざれども

プロペラの唸りも消ゆる雲の中ピラをば撒きて別れたるかな

朝夕の時雨にあする鶏頭のいのち寂しき秋となりけり

「潮音」第十二卷 二月号

餌箱(特選)

菊枯れし庭のさびれものかげに晝ふかくして鶏のあそべる

にはとりの餌箱をたたく音寂し冬至の庭のうす曇りして

はりきりし鶉の聲のたのもしくあかつき白む窓明りかな

吹く風に日はさびれるて枯桑の骨いたましき師走窓かな

鶉どりのさわぐ谷間に櫛の實を木にのぼりとする山日和かな

汐かぶる磯の網小屋さむざむと北の海より冬は來にけり

土間の隅にころがりてある山の芋ふる里の冬にかへりきにけり

ともかくも年の暮なり今宵わが月夜の庭に餅をつきつつ

「潮音」第十二卷 三月号

年の瀬の思ひ寄り合ふるろり端母に灸をすゑまうすなり

はや起きて餌箱を叩く鶉にけふ初旅のころせかるる(歌會へ)

唐湊とよ山の山かげふかく灯す灯に鳴りをしづめて眠る竹山

銀杏の葉落つるかぎりは落ちはててこのごろ島は雪を光らす

待ちまちし冬木枯の海風ぎてけふとどきたるまごころのふみ(伊勢氏)

木枯に震さへする旅の空こころ許なき別れをばせし(安田邸へ)

「潮音」第十二卷 四月号(二)より同人)

鶯

草の戸にあたる春日のとろとろと飼ひならしたる白兔かな

春日さす庫裡のうしろは竹やぶに椿の花の散りてありけり  
竹やぶを出でて啼きあふ鶯の幼き春にかへりきにける

きさらぎの海のあいろもたちかはり磯に海苔ふくあたたかさはも  
この朝の雨がほこべるあたたかさ霽の中より鶯の啼く

光り出て桃の木の芽のふくらめばそこはかとなき春ごろなり  
菜の花の土にいつかとかげろふは立ちゆらぎつつ春づく日かな  
立ちかへる春よそほひのこまごまと磯には海苔の青みきにけり

この谷の舊正月をあてにして旅商人ら遠くきにけり  
春もはや聲のとのふ鶯の朝からないて山かすむなり

菜の花にちろろちろろと春日さし雖も目をあくころと思へり  
星青くにほふ月夜となりにけり庭に出し置く寒ざらしの粉

「潮音」第十二巻 五月号

忘れ雪

杏の花闇におぼろに浮きたちて蛙の聲のいざよふ夜かな  
土を出て初鳴きをする田畦の今宵の聲をひとりききをり  
金箋花陽にあたたかく咲く庭の猫に日永き春休みかな

日に三度鶏に餌をやり留守居して歌を友なるふる里の春  
櫻の芽を摘むがうれしき日なりけり谷間に冴ゆる鶯のこゑ

春はまだふく風さむく断岸の海石をあらふ朝の青潮

おほかたの友に訣れて世にいづるこの子のこころ思ひ見にけり  
海棠の花にはつかに降りかかりけしきを見る忘れ雪かな

「潮音」第十二巻 六月号

種物賣

生簀籠のころがりてある砂山に春の日あしは音なくふけつつ  
山椒のあへものうまき朝御膳春たねものふれゆきにけり  
種ものの振れ賣りとほる門の邊に春かげらふのゆれつつあがれる

青竹の樋の清水を茶に汲みて小床の花は山ざくらの枝

春の日の河原に二つせきれいはしばらくをりてとびゆきにけり  
わがころかくて澄みゆけししみとランプを磨くひとりこもりて  
ここにまた厄病神の厄除けのべ繩をはる村にきにけり

門の戸を閉じて人は花ばらにつつしみふかく住ひなしたり  
陽炎をふみてきにけり眼のまへにほつかりとしてからたちの花

「潮音」第十二巻 七月号なし

「潮音」第十二巻 八月号

のきしのぶ

陽ぼてりのまだのこりある庭掃きて誰にも言へぬことを思へる  
石菖は青みて鮑のよくあそぶ水うつくしき谷の村なり  
蚊柱は立ちくづれつつ軒暗し胡瓜島の母を呼ばへる

青みつつ木の葉の闇となる窓に螢のくるを待ちてゐにけり  
おんもりと梅雨雲たれてむしあつき夜の疊を匍へる白蟻  
雷の音はたとやみたる沼明り輪に輪をつくる水すましかな

五月雨や庫裡のうしろの竹山に夕べは青くたつ煙なり

軒にせまる青葉の山にわく霽の梅雨ふかくして朝のしづかさ

「潮音」第十二巻 九月号

○

むらがりてつばくらめとぶ青潮に炭を積みこむ船人のこゑ  
朝焼の水うつくしき並倉に霽はれてゆくつばくらものこゑ  
椎の木の闇にほうほと鳴くこゑの寝苦しき夜となりけるかな

五月雨は土藏の壁にしみいりて一日おつる柿のむだ花

「潮音」第十二巻 十月号

ふるさと

八重たむふる里の山に立つ虹の閑かにわれの住みぬべきかな

われも出て鋏を振りをりふる里はお盆迎への道普請とて

井の端の樋に清水のあふれをり夕べとなれる蛸のこゑ

盆來るや垣の酸漿紅さしていまもをさなき妙瑞信女

屋廂に足長蜂の巢をかけて晝しづかなる山のわが家

上げ汐の洲を越えてくる葦間なりざぶりと水に網を打ちたる

つぎつぎに抜手をきりてくる子らのどの顔もみな見覚えのあり(帰省)

この平ら散り雲高き風晴にひらひらとして旗をあげたる(測候所)

この宮の廂にたまる杉落葉秋はあらしの寂しかるらん(慈眼寺)

「潮音」第十二卷 十一月号

海月

唐黍の素枯れに蟬のぬけ殻のとりのこされしきのふけふかな

白犬の舌を吐きつくる道の晝なほ暑き秋日照かな

滯消えて子らは海よりあがりたり磯の小萩に光る夕露

かまきりは首をすくめぬ窓口に夕ほとほりは冷えてゆきたり

誰やらが好みの白のパラソルの野菊の道に似合ふころなり

石焼くる晝ほとほりに船虫の這ひあがりくる岬道かも

めつきりと秋立つ風に磯崎の汐黒々とつやを消したる

竹やぶに雀かくれて田の中の案山子寂しき月あかりかな

石槽の清水の豆腐冷えてゐて椎の小花の散る軒端なり

凧をだく山の狭間の青潮に海月の夢のただよふ昼なり

「潮音」第十二卷 十二月号

秋の光

唐辛子赤みさしきぬ町の子が卵を買いにくる鴉日和

ふる里の海はるかなる峠なり家苞にもとひろふ松かさ

濡れ縁に紅葉こぼれて奥の間は基石をくづす音しづかなり

網小屋に網をしまひて青北の白浪あぐるふるさとの海(青北は日和の事)

昭和二年

「潮音」第十三卷 二月号

埋るる冬

吹きとがる崖岩角にせに苔のいろかわきつつ生くる冬なり

年の瀬の波止場に白き浪よせて聲をしぼれる皿まはしなり(支那人)

枝うつる小雀に冬の日ののびて松ぼっくりを掘る仕事なり

菊の香や柱に珠数のむらさきの清らかにしも住みておはさむ

霜とくる菊の素枯れにかげろうのありとばかりの小六月なり

篠竹の藪にぼつちり灯がつけば監ざかな焼く匂ひもぞする

裏口は枯桑の木の畝つづき遠嶺に雪の光りみせつつ

「潮音」第十三卷 四月号

紅梅

ふかぶかと軒をうづめて積む雪の谷よりあがる鶉のこゑ

雪解水たぎちながるる谿川に芹青めば春たちぬらむ

河青く靄より出でてあけぼののしろがね冴ゆるさくらじまかな

紅梅の花に粉雪のふりかかりものあはれなる春たちにけり

身だしなみつつましくしてあはれにもまことを見する人にありけり

うすがすむ御寺の屋根を見るばかりただしづかなる鄙の春かな

昭和三年

「潮音」第十四卷 三月号

秋冬

こほろぎは縁ばな近く鳴きつづり障子の白き秋となりぬる

秋の冷えしのびしのはひ寄りて障子は白くなりけるかな

鶉のこゑつぎつぎに啼きかはし夜明おもしろき頃となりけり

朝かげをまちてひろげし新菓の匂ひはすでに冬のものなり

水涵れし刈田の果のかげろふに田螺をひるふ人のうごける

歌をさへなげうたしめしかなしみの漸く癒ゆる秋としなりて

忙中感

この年の師走もせまる霜の夜に氷を砕く人のけはひす

三日月のうるほふ露に白菜の玉もきよらにむすぶころかや

朝焼の雲の茜にさそはれてうるほふこころうれしかりけり

元旦

いま掃きし庭の白洲の箒目に足跡つけてにはとりの鳴く

「潮音」第十四巻 六月号

松の芽

ゆるゆると浚漉船はうごきをり春の潮のとりみゆくとき

乳いろに水はぬるみて城垣のたんぼぼの實の春たけにけり

城山の隧道越ゆる汽車笛は寝ごろのわれを眠らせぬなり

満開のさくら見にきてふるさとの山を見てあるあはれなる身は

かな網に朝日さしきてしるがねの鶏のとさかの紅沓えにけり

しみてゆく雨に木の香のやはらかうただよふ木場は春しとどなる

やはらかう木屑にしみる春雨に齒車ひびく製材所なり

井の端の落の若葉に齒磨の粉をこぼして朝さはやけき

あがきつつ籬をいでんとする駒に草ひとつかみやる童なり

ぐみの芽や光まぶしく細めたる目に小さな野への雲雀は

フキルムに現れきたるふる里の山河よわれを泣かしむるかな

桑の芽の萌黄の春にゆるされしもつたいなさの唯涙なる

「潮音」第十四巻 七月号

天蓋

ふるさとにいと夜をいねてこの朝の春蠶の桑を摘みわかれきぬ

軒ならび青葉にこもるふるさとと蠶あがりをはへて晝音もなし

梅雨晴や青葉が中に朱のいろの五輪さびたる塔の立ちたる

うんうんと御寺の鐘は山内の青葉いきれにうなりつつゆく

うれれ麥の穂波に揺れてゆく馬車のたどたどしかりふるさとの道

しののめの空をわたりて苗代の水にぞびびく杜鵑トビのこゑは

五月闇ふかしきしじまに白百合のいよいよ青く匂ふしづかさ

天蓋の花ともいはん月の暈われのいのちはもゆるなりけり

「潮音」第十四巻 八月号

青雲

船に塗るペンキのいろに梅雨はれて入江の水は濁りけるかも

夏空の雲にしるじろと晝花火夢をひろげてやがて消えにき

このいく日降りつぐ雨にあぢさるの珠花たまごばなのいろあせにけるかも

風ふけば杉の峯より雲おちて佛のいます山の坊なり

ふるさとの山に湧き立つ雲見れば人の聲音も聴くおもひなり

木戸口に樋はこぼれてくちなしの花盛りなり君が家居は(田上庵)

「潮音」第十四巻 九月号

生薑

厨べに妻が洗へるうす紅の生薑の匂ひびくかな

晝顔の花にきてる浪の音夏かげるふは砂にゆれつつ

軍艦長良入港

はためくや稻妻よりもなほ青き光りを空にきしらしにけり

蓮の葉のゆらぐがなかにひと本の白き荅は光りぬるかな

草いきれ石のほのほのに紫の背を光らせて蜥蜴をりたり

山の手の冷水町は木戸毎に樋槽をかまへもの冷やしあり

妻がする夏の夜なべのすすぎもの月の光はうるほひにけり

「潮音」第十四巻 十月号

海月

片浦のうしほは青く透きとほり海月ただよふ秋となりぬる

しけあとの浪は太くしうねり来て海月を浜に打ちあげにけり

松かさを軒場に干してひっそりと磯街道の秋の日の照り

浜秋の露づく冷えに暮れてゆく渚の浪のほのかなる音

墓石の苔おとしるる山かげは法師蟬鳴く聲ばかりなり

五位鷺の古巢のあらはに落葉して棕の梢をのぼる月かな

くつわ虫壁にすがりて鳴く閨のねものがたりの秋となりぬる

ふるさとの古き屋敷の草をぬくころ明るくなれと思ひて

七夕の祭もすぎしきのふけふ秋の蠶をまたはきにけり

「潮音」第十四卷 十一月号

からたち

夕茜ほそくただよふなばらの岬のかげはくらくなりきぬ

ひといろにむらさきうすき島かげの波にはてゐるフランスのふね

秋の野の水のひかりはちらちらとかすみのすゑに見えずなりにき

からたちのつぶらなる實は秋かぜのいばらがなかに黄いろかりけり

綿をうつやぶのうしろはからす瓜かぜに吹かれてひもすがらなる

星の座の北斗のひかり天の川まなこに冴えてふりあふがるる

紙さらす川瀬のみづは山かげの朝のひえよりすみてゆくらむ

射的場のうしろの庭はちりひとつさやるものなき秋の晴れなり

「潮音」第十四卷 十二月号

花めうが

かた浦の苫屋にあがるあさげむり海ほのぼのとあけにけるかな

巢のたまごかごにあつめてゐるときしをさな子にして母はいまさむ

にはもせにむしろをしきて粟の穂をたたけば秋の日はくれにけり

かへり咲くひととぎくろうすうすと秋のひかりにきゆばかりなり

花めうが雪よりしろくいきほひてこのあかつきのつゆにぬれたる

いさらぬは秋ことさらにすみ入りて水鏡みるよきをとめたち

谿ふかくおち葉ながれてくるころは網代をかけておくがたのしき

桑はたの黄いわくら葉にふりすぐるしぐれのあめはつめたかりけり

黍の實のたか穂あらしにくるひわにいちにち人は鳴子ひきをり

昭和四年

「潮音」第十五卷 一月号

蒲の穂

けふ秋の街はいちにち花の日のもよほしごとにあかるかりけり

こすもすのはなあかるくし朝あけて牝牛のちちをしほりつつあり

秋の日や蒲の穂絮のふはふはとかすみてとほき佐多岬なり

蒲の穂のひかりしづめるみづうみにゆふべの靄はひろがりけり

ものおきの白を巢にしてにはとりは春のひな子をかへしそめたり

すな山にぼつちり二つ藁にほの秋さびれゆくそとうみのいろ

よろこびの秋はちかけれしるたへの絹おる稜のはづみくる日や

掠の木のこずゑをかすめふりあふぐ星は霜よの花と冴えつつ

かた浦の磯やまかげにおふといふ生薬いんぐすりをばとりて來なまし(病妻)

「潮音」第十五卷 二月号(大会記念号)

吐息

この浦や春のうしほのただへゐてしほを焼くこそしづかなりけれ

つとめにといゆく坂道あさあさに海のながめのあるをたのしむ

白雪にふかく埋もれてあるときも冬菜は青しあらあらしとして

ひとつねの土に生姜を埋むるときながる雪は白くあるかな

子どもらの凧はわが家の屋根よりも高くあがりて晴れにける朝

冬晴るる小松がはらにわれひとり松露をほりてゐるがたのしき

すゑものの窯を見まもりあくる夜のなが鳴き鶏は吐息にも似し

茶の味をやうやくわれの知り分くるこのおちつきに思ひいたりぬ

「潮音」第十五巻 三月号

浮雲

雲一つひろく遊びてゐる時はわれのころはうつろなるなり  
青松の刺葉をしのぎ降りたまる雪にぞ清き聲のあるなり  
梅の花さくころほひは薩摩瀉浦わの潮のいろかはりゆく

薩摩大隅には「黒ぢよかとて」焼酎を沸かす瓶あり。

山里は黒ぢよか沸かすそ冷えに鶴ひよどり焼きて食らへる  
霜夜にも枯木の枝は芽をはると思ふころのわれをはげます  
ねんごろに人のつくれる苗床はみなみに向きて日を入れてあり  
焼けあとの黒野の土に萌えいづる蕨を思へ何を嘆かむ

「潮音」第十五巻 十月号

龜の卵

海山の空にいくたび立つ虹は涼しく秋をさそふなるらし  
秋立つや都の塵をのがれ来てわが魂の息づく日なり  
産みための卵を市に送る日ぞ夜明けの土間に荷を造りをり  
親を待つところ一途に口あけて巢よりこぼるる雛つばくらめ  
月一つ夜明けの濱にのそのと卵を産みにあがる海龜

夏の夜は早あけがたとなりけり龜の卵をさがす子らはも  
この真晝根太の膿を押し出してほとほと父は疲れはてたる  
生青き根太の膿を押し出して蝦蟇膏薬を父は塗りをり

猫につく蚤をつぶして日中の暑さをわれのまぎらはしるぬ  
石灰のまき散らしあるすさまじさ鶏すらもここにあそぼず（チブス）

「潮音」第十五巻 十一月号

剃刀

こつそりと死棺をいだす病院の裏口にして紅き鶏頭  
屋上の露草の秋のさやけさにほしいままにしとべる群れ鳥

年老いて縄目を受くる不甲斐なきこの人の眼を見るに忍びず

コスモスの花あかるけれわが妻は鏡に向ひ眉を剃りをり

海山のながめもさやにゆく船の海月をくたく大隅の秋

「潮音」第十五巻 十二月号

山の獸

貫くや山筈して射的場の空をふるはず砲の弾動

兵二人芒の丘に信號をして居りて秋のたけなはなる日

秋五夜母がさはせる樽柿を手紙に添へて送り來にけり

嫁ぎ來て金に屈托をすることの外に苦勞はもたぬ妻なり

藁すぐる秋の日ぼこり石路の花の黄色にふりかかりつつ

はらばひて谷の清水を飲みてをり山の獸を思ひいでけり

糸を巻く妻に手をかす秋の夜のこほろぎの聲の静けき砌

水草の露にわづかにすがりゐる秋の螢は飛ぶちからなき

馬の子に付き添ひてゆく人は皆馬の話をしてゆきにけり（馬市）

現し世の險しき中にわが歌の開けてゆくを信じてゐるなり

わが歌のみちのゆくへにありと思ふ寂しきころ棄てんものは

昭和五年

「潮音」第十六巻 三月号

鼠の罌

植木屋の鋏を入るる音冴ゆれ大霜凧ぎの庭松の上

冬の夜のよなべに妻がひく眞綿光りやはらかにほぐれつつゐる

水無くてからびし谿の岩を割るダイナマイトの遠き反響

たまきはる命にひびく寒の水朝々のみですこやかに居り

木戸早く閉めて用なきある宵は鼠のわなをかけて寝にけり

眞夜なかに霜の凍てつく街道をごとりとごとりと荷車のゆく

「潮音」第十六卷 四月号

河口の春

團平船艚を一ぱいに漕ぎてをり青海苔のいろきざしそめたり

ひきわたす寒の霞にモーターのあらはれ出づる大隅の海

土塊をおこしてけふも夜となりぬ親代々のわれは百姓

トロッコ一つはづみて野をばかけりをり耕地整理ははじまりにけり

爐の實のかたまり黒き曇り日は芋焼酎を爐邊に呑み合ふ

うす霧の妖めかしたる宵月に寒の夜櫻の枝ゆるるなり

血をはきつつうたひ上げたる歌はみな涙の中の吾を鞭打つ

繁藎の青むあしたを鶏小屋に鳥のかひこの殻を割るなり

青み立つ野を一ぱいに戸を明けて春の嵐を部屋に入れしむ

唐焼の火花鉢にふとぶとと玉芽をあげし春牡丹かも

み祖にぞ茶をまゐらせて掌を合はすこの善き事を誰れがをしへし

春泥の巷あかるくなりけり人形市にならぶ人形

あまねくし春はあふれて巢の中に鶯雀の卵二つありたり

「潮音」第十六卷 五月号

島津大守

鬪犬を春の衝に曳きつれてなすこともなき人をさびしむ

區劃整理終へし衝は朝霧の晴れゆく坂に現はれ來たる

沖遠く航空母艦泊てて居りこの一浦の春大いなり

常安の峯に櫻はなびきををり島津大守の大き石碑

刑務所の官舎の垣に萌えてゐしからたちの芽は忘れぬなり

「潮音」第十六卷 七月号

五月闇

玄鳥まだ翔けりをり門限の兵隊あまた道を通れる

食ひ足りてかひこのあまた圓らかにまめまめしくも揃ひたる晝

新名主・鹿児島県国語教育史資料―その二―

初作の新田に落つる山水はうす濁りして夏浅きかな

野卯つ木の花のさかりとなるころや水神の碑を濡らす五月雨

灯を消してを黒く深く眠りたる軍艦二つ五月闇なり

草螢青く光れる野の闇をかき濁しつつ鳴く蛙かな

螢火の青き光はあぢさゐの花に照る時大きかりけり

總身に脂をふきてゐる暮の生青臭き匂ひを感じず

糲種をまきつけし田に青雲のうつるあしたのかっこうの聲

閑古鳥しきりに啼きて梅雨づくや珠もりあがるあぢさゐの花

少年のわれを生つ粹眞無垢に育ててくれし國の山川

東京へ工師俊二君をおくる

東京のジャズの衝に濁らざる歌あることを思ひ待まむ

「潮音」第十六卷 八月号

角度

朝つく日都會の屋根の直線の入りかひ描く角度の美しき

氣まぐれの流行ならず因るところ深きを思ふ角度の時代

しつこいの扉にガラスを突き立てておぞまじきかもわづかに眠る

内職の妻が稽古に踏むミシンこのごろわれも早起をする

汗しつぱり掻きて歸れば子供服縫ひ上ぐるとて人素つ氣なし

労働者大樹のかげに眠りる夏の日中のふところの風

人殺し強盗自殺ものゆすり世の罪業はつきからつぎと

ハイジャンプ飛躍してゆく若者の張り充ちてゐてぶととき腕

扉を開けて氷室の中の氷塊を取り出だしをりわく雲の峰

一瞬の視覚ながらに氣さんじゃトラックに山とつめる氷塊

冷蔵庫外は眞夏の晝ながら氷りのしづく垂れてをりつつ

熔岩の間に湛ふ瑠璃色の波に切り入るモーターボート

生き熊を見世物にして熊の膽の振れ賣りのゆく大通りなり

「潮音」第十六卷 九月号

朝會

三千人集りてみる朝會の旭日の空に旗を掲ぐる  
夏休み親を助けて働けと眞實のわが言葉を吐ける  
鐵筋の大講堂に打ちひびく朝の齋めの拍手の音(夏季大学)  
説き明かす經濟史觀ひた押しに社會意識を呼びさますなり  
經濟の理法を説きてマルクスに至る氣先にたじろぐべきかは

「潮音」第十六卷 十月号

わが家

わが村の道路工事は百姓を土工に出してやや景氣立つ  
繭の値を讀み上げてゆく議事堂は重苦しくて息つまるなり  
役場にも老朽淘汰のあるといふ噂の立ちて盆ちかづきぬ  
大先祖和泉守の墓碑銘も磨り減らされて傾くわが家  
三十年勤めつづけてわが家を傾けにける父にしありき  
三十年の苦勞をささむ顔の皺見つめてをれば何も言はれず  
あからさまに傾く家に想ひいたりわが慾心の一途につのる  
慾心をなど卑しまむ一人の兄を助けて家興すべき  
金策にかけずり廻る父の顔思ひ出しつつ草捲りをり  
同窓會も今のわれには関はりなし車を押して畑に來にけり  
三百羽時を出づる鶏の羽ばたく音に澄める秋空

「潮音」第十六卷 十一月号

表情

映畫館吐き出される人人のいまだ涙のかわかぬ表情  
潜水夫掃海作業してをりと思ふ港の秋潮の冷え  
萩咲くや朝早く來て生徒らは奉安殿の庭齋めをり  
世の常の功名心にかかはらぬわが性格を疑ふある時

ことごとくに自己清算の餘地多き時代に生きて生き甲斐あるなり  
「潮音」第十六卷 十二月号

村にて

大束の巻取紙のすひこみてゆるぎ出でたる輪轉機臺  
底ふかき推理に缺くる性格を父の血なりと思ひ知るなり  
出來秋の稻みづみづとしだれをり小作争議の村と思へず  
山のかげり大きく黒く暮れてゆく一千米突の高原地帯

三、「工程」 昭和十一年八月號 掲載の和歌

壯心

磯長武雄

壯心のうつぽつとしてよみがへる日は來たりたり春の渦潮  
外洋に逆向く春の新潮を潜水艦は押し切りて來る  
南風吹く漁場の眞晝にはらわたのむる臭ひを或る日いとはず  
血をうけし家代々の獅子鼻はわが性格をここにつくりぬ  
年輪をかぞへて居りて人間の齡のことに思ひ至れる

吾子四首

蝸牛縁に匍はせて遊ぶ子につくづくながしこの五月雨は  
時たまに母の乳房にくひ下る子は四つなり物言ひととのふ  
物言ひととのひて來て四つになる子をまん中に食堂にぎはふ  
ふる里の空見ゆるなり子を連れて岩崎谷に汽車を見に行く

「潮音」誌上の磯長の和歌の探索については桑原一氏に多大なお骨折りをいた  
だいた。記して感謝する次第である。なお「鹿児島県国語教育史(VI)―磯長  
武雄研究ノート1」(「教育学部研究紀要」第40卷所収)のP四三〇下段七行〜十  
四行のうち十三・十四行は削除し、残りはP四三一上段六行以降にそう入する。